

FUKUUCHI

Public
Relations

No.236
August

広報ふくち

特集「終戦80年」

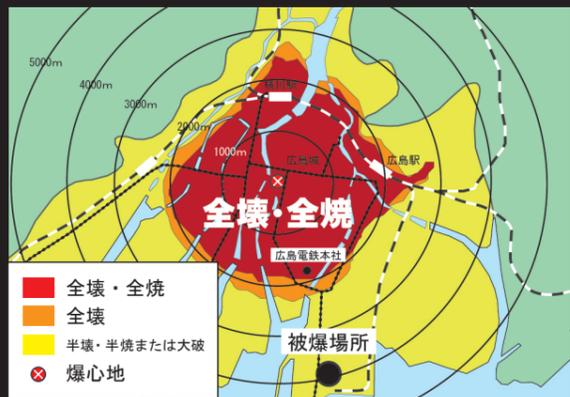


2025

8

平和への祈りを込めて千羽鶴を折る子どもたち。沖縄戦の悲惨な記憶をたどり、平和の尊さを学ぶ事業「少年の翼」が7月25日～27日に実施され、福智町内の13人の生徒たちが参加しました。終戦80年がたった今、私たちは戦争の傷みや凄惨さを知り、同じ過ちを繰り返さないために、その真実を言い伝え、今と未来の平和を守っていかなければいけません。今月号では、戦争という過去を見つめ学び、「平和」について考えます。

→爆発の瞬間、巨大な火球から強烈な熱線が放出され、周辺の地表は3,000〜4,000度にもなり、最大風速440m/秒の強烈な爆風が放射状に広がり、約10秒後にはほぼ市街全域に達しました。小椿さんが務めていた広島電鉄本社、そして当時、住んでいた寮も全壊し写真などもすべて全焼。死者は約14万人。



広島電鉄に勤務していた
小椿 朝子さん(金田)

この全世界から1日も早く戦争や核が無くなることを願う祈るばかりです。

あの日、電車の中で背中に感じた恐怖

広島原爆

何げない朝、いつも通り車掌として乗客を安全に運んでいた小椿さん。その時、背後に感じた恐怖。その瞬間、日常は恐怖へと変わった。

昭和20年4月に広島県の尋常高等小学校を卒業後、14歳で広島電鉄に入社した小椿さん。私は、8月6日いつも通りに朝5時過ぎに出勤し、車掌として乗客を安全に運んでいました。爆心地から4km地点の鉄道局前電停(旧名)で乗客を降ろし、発車ベルを「チン」と鳴らしたその時でした。「ピカッ」と光り、私は背中を刺されたような熱さを感じました。同時に電車は止まり、一瞬あたりは真っ暗に。急いで乗務員とともに防空壕へ避難。その後、五日市の避難所へ歩み始めると周りの建物の壁は崩れ落ち、電鉄



社員の人たちは、顔から血を流していました。しばらくするとひどく怪我をした人たちが肌と肌が触れ合う狭さで立ったまま乗せられた軍隊のトラックが目の前を通り過ぎ、私たちが向かっている避難所のほうへと進みました。その少し先に、小さな子どもがうずくまっており、衣服は朽ち、肌は灼熱に焼かれ、息の無い母に「お母さん、水、水」と強く訴えていました。私は、なにもできず「ごめんなさい、ごめんなさい」と言つて胸が張り裂けそうな思いでその場を去つたのを覚えています。8月6日8時15分原爆が上空600mで炸裂し、多くの人の命や思い出すすべてを一瞬にして奪い去り、被爆後の恐怖や身体の不調などの影響は今でも残っています。あの日のことは1日も忘れることはありません。たくさんの方々の尊い犠牲の上に、平和があり、私はこれまで生きてこられました。全世界で戦争が無くなり、二度とこのような無残な出来事が起こらないよう毎日、祈り願っています。

母国のため家族のため命を燃やす 特攻

葛藤や恐怖を抑え特攻隊へと志願した永末さん。終戦を迎えて特攻待機が終わり、救われたこの命。戦友たちが残した思いや築いてきた平和を守るために。

神風特別攻撃隊(特攻隊)

とは第二次世界大戦期に日本海軍によって編成された爆装航空機で体当たりを行う攻撃部隊。日本の劣勢が濃厚となっていた第二次世界大戦末期、本土防衛のため沖縄を死守する目的で編成されました。永末さんは、沖縄に来攻する連合国軍に対し特攻攻撃を実施した日本海軍の作戦「菊水作戦」で編成された白菊特攻隊に志願し配属されました。いつ出撃命令がでるか分からない状況の中で、死ぬための訓練は続けられました。菊水作戦は1号から10号まで行われ、118



神風特別攻撃隊に配属された
永末 千里さん(弁城)

↑田川商工学校を卒業後、昭和18年8月に鹿児島海軍航空隊に入隊。昭和20年3月に大井海軍航空隊神風特別攻撃隊として特攻隊の訓練を行いました。昭和52年2月に定年退職し、後世に戦争を伝えるべく、戦争に関する本を11冊出版。令和元年8月4日に逝去。



↑昭和18年11月に初めての飛行訓練を行い、初めて味わうスピッドに興奮したという永末さん。

機が帰らざる攻撃に参加し、約230人の若者が命を落としました。神風特別攻撃隊に配属された時は、死を覚悟したものの、家族や故郷を思い、死への恐怖が強くなり、覚悟も薄れ、この時に「生」への執着がいかに強いものであるかを知ったという永



↑神風特別攻撃隊 八洲隊(第3大隊第3中隊)の結成当初の集合写真。永末千里さんは中央列向かって2人目。

末さん。そして特攻隊編成から3か月、沖縄戦は終戦を迎えて白菊特攻隊による作戦は中止され、特攻待機を解かれました。永末さんは定年退職後、特攻隊員の精神的苦難を克服し、死地に向かった戦友たちを慰霊するため、そして二度と、戦争で命が奪われることがないように自身の体験をもとに11冊の本を出版しました。戦争によって約4000人の若い特攻隊員らの人生が奪われました。その先人たちが命をかけて戦い犠牲となった上に今の平和があることを我々は決して忘れてはいけません。



永末千里さんの甥子
永末 猪年さん

体験者の貴重な声を風化させず伝える

千里さんは、戦争の真実を伝えるために本の出版やメディアへの出演などもしていました。私にもよく自身の戦争体験や大東亜戦争で戦死した私の父(千里さんの兄)についても詳しく話してくれました。戦争体験者のリアルな声は重く私の心に響きました。あの戦争を体験した世代は今、多くのかたが90代を越え、語る人は、少なくなっています。その貴重な戦争体験者の声を私たちがしっかりと伝え、後世が歩む平和への道しるべとなつてほしいです。

先人たちが残してくれた真実
受け止め繋げる未来の平和に

願い祈る平和 心に刻む戦争の真実

私たちは、平和を願い続けることを忘れてはいけません。80年前に「戦争」という残酷な事実があったこともこの夏、先人たちが残してくれた思いに目を向けませんか。

戦前を生き見つけた使命 後世に伝える戦争の真実

「戦争は敵も味方も不幸にする最大の人権侵害。その罪深さを訴え、二度と戦争が起こらないよう戦争の真実を後世に伝える」という強い思いで武富慈海さんの父である武富登巳男さんが1979(昭和54)年7月に個人での設立は日本

初となる「兵士・庶民の戦争資料館」を自宅の一部を改造して開館しました。各地の遺族から遺品が寄せられ、300点以上の資料が展示されています。そのほぼ全ての遺品を手にとつて触れることができ、来館者たちは「想像を超えて強く心に響く」と驚きの声を上げています。戦争の過酷な環境のなか鉄のヘルメットを被り、三八式歩兵銃(4kg)と30kg

の荷物、防寒着を着て行軍した兵士たちの様子を写真や文書で見ただけでなく、実際に体験することができ、戦争を五感で感じることが出来ます。「人は過去のことはずぐに忘れてしまい、同じ過ちを繰り返す生き物。過去の教訓から学び、後世に伝え続けたいといけない」と語るのは、館長の武富慈海さん。現在も父の思いを引き継ぎ、海外や全国からの来館者に貴重な遺品たちを通じて戦争の愚かさや悲惨さを伝えていきます。武富さんは毎年、伊方小の



「久留米歩兵第48連隊 昭和13年」や航空隊 昭和16年で戦争を経験した武富慈海さんの父・武富登巳男さん 当時21歳。

出校日に平和学習の講師として子どもたちに戦争の真実を伝えていきます。今年の7月9日には、大和青藍高等学校(直方市)の看護専攻科1年生35人の生徒たちに命の尊さや千人針などの遺品に込められた家族の思いなどを伝え、平和教育の一助を担っています。



↑当時、実際に使われていた遺品を手に取り、真剣な眼差しで見ると大和青藍高等学校の生徒たち。

未来の平和を守るため 一人ひとりが願う「今」を

現在、戦後生まれの国民が9割を越え、若い世代にとっては遠い過去の出来事になっている「戦争」。また、戦時中を過ごした人たちの貴重な話を聞く時間は確実に少なくなり、近い未来には、無くなつていきま。私たちは今しか聞くことのできない先人たちの貴重な肉声にしっかりと耳と心をかたむけ、戦争という残酷な真実を受け止めなければいけません。過去の戦争が風化の一途をたどる今、戦争を知らない世代に求められていることは、この悲惨な真実を自分事として



↑伊方小の平和学習会で生徒たちは遺品を実際に手に取り、歴史を肌で感じています。今年も学習会を実施予定。



大和青藍高等学校 看護専攻科1年 佐藤 恵さん

【平和学習を通じて】

兵士・庶民の戦争資料館には、戦争当時の書物や写真、実際に使われていた服や武器が展示されていました。その中でも、私の年齢と変わらない若い兵士たちの遺書に目をひかれました。きっと、兵士たちは私たちが想像もできないほど辛い思いをしていたんだろうと思いました。今こうして私たちが平和に生活できているのは昔の人たちが築いてくれたからです。私たちは、昔の人たちが築いてくれた平和を壊す戦争は二度としてはならないと強く思いました。

考え、今ある平和が当たり前ではないと知ること。平和である今だからこそ戦争を語り、平和を築いてくれた先人たちが流した血や涙、紡いできた思いを忘れず、後世へと語り継いでいく必要があります。これからも平和への道を歩むためには、80年前の残酷な真実を風化させてはいけません。私たち一人ひとりが自ら足を運び、戦争の恐ろしさを心に焼き付け、今の私たちに想像もできないくらい凄惨な真実があったことを知ってください。我々が平和を願う心を持ち続ける限り、80年前から紡いできた思い(平和)は未来に届き、後世を守ることにつながっていきます。

終戦から80年目の節目に平和について考えてみませんか。

兵士・庶民の戦争資料館



館長 武富 慈海さん

兵士・庶民の戦争資料館は、入場無料で館内の資料は戦争当時を身体で感じていただけるよう、自由に手に取って見ることができます。この機会にぜひ、国や愛する人々を守るために命を捧げた方々の遺品から伝わる戦争の凄惨さを肌で感じ、知ってください。

- 休館日 水・木
- 開館時間 13:30 ~ 17:00
- 入館料: 無料
- 場所: 小竹町大字御徳415番地13 電話 0949-62-8565 (要予約)



戦後80年特別企画展 【戦争と炭坑のマチ田川】

近代の戦争の記憶とともに石炭によって栄えた田川の歴史をたどる3期連続の特別展を開催中。戦時下の田川を中心とする筑豊の様子、人々の生活や石炭産業との関連について紹介。



日時

令和7年4月24日(木) ~ 8月24日(日)
会場: 田川市石炭・歴史博物館(9時30分~17時30分)
※詳しくは、お問い合わせください。
田川市石炭・歴史博物館 ☎ 44-5745

開戦84年 【陳撃耀 チェン・チンヤオ展: 戦争と美術】

今年、第二次世界大戦の開戦から84年目にあたります。本展では、陳撃耀の作品に加えて、制作のために参照された戦争記録画や戦時中の各種資料もあわせて紹介。

日時

令和7年7月12日(土) ~ 8月31日(日)
会場: 田川市美術館
観覧料: 一般800円(700円) 未就学児無料
高校生400円(300円)
小学生200円(100円) → 詳しくはHPをご覧ください。
田川市美術館 ☎ 42-6161

